選択

広島県立広島特別支援学校
高等部第２学年　外田　咲

選択

広島県立広島特別支援学校
高等部２年１組　　外田　咲

「外には、ただ、黒洞々たる夜があるばかりである。」

この一文は、私が芥川龍之介の『羅生門』を読んで、キーワードとなると予想した言葉である。

羅生門は、平安時代の羅生門で繰り広げられる「生きるための選択」が主題となっている物語である。明日の暮らしをどうにかするために「盗人になる」か「飢死する」かを迷っていた下人は、羅生門の楼の上で死人の髪の毛を抜く老婆と遭遇する。問い詰めると老婆は「これをカツラにして売らないと飢死してしまうので仕方のないことだ」と零し、その言葉が、下人の心に「盗人になる勇気」を生まれさせた。そして下人は老婆の着物を奪い取って、黒洞々たる夜に消えていった。

では、先述した「外には、ただ、黒洞々たる夜があるばかりである。」という一文は何を暗示しているのだろうか。私は、老婆の心情を表しているだけでなく、下人の行方や心の変化についても表しているのだと考える。物語では下人のその後について何一つ書かれてはいないが、この一文から、私は下人の行方について２つの可能性を考えた。

１つ目は、下人がその後躊躇なく盗みを繰り返して生き延びるという道である。下人は老婆から盗みをしたことで、罪を犯す際の躊躇いを感じなくなり、最初はもっていた「善の心」をなくしてしまったのかもしれないと思ったからだ。また、私が思う下人にあった「善の心」というのは、「ありとあらゆる悪に対する反感」とも言える。老婆の悪事を見て湧き上がった激しい憎悪は、下人の紛れもない本心の一部だろう。その気持ちが、老婆から盗みをした瞬間に消えてしまったのではないか。

２つ目は、飢死するか盗人になるか再び悩み、結局命を落としてしまうという道である。盗みを働いてしまった下人だが、もし彼の心に“罪悪感”が残っていたら、と考えると、彼はもう盗みができなくなるのではないかと思ったからだ。最初はまだ「善の心」があったはずの下人なので、もしかしたら我に返って罪悪感に苛まれたのかもしれないと思った。私の日常を振り返ると、罪悪感はいつも遅れてやってきていた。「こんなことやらなければ良かった」「自分のせいだ」と、まるで首を絞められるような苦しい気持ちが込み上がってくる。人によって罪悪感の感じ方は違うと思うが、もしかすると下人は、老婆から盗みをした後、このような気持ちに苦しめられたかもしれない。

この「羅生門」の面白さは、解釈の仕方が人によって異なるという点だ。ある人は「下人は奪った着物の金で生活がしばらく何とかなりそうだからハッピーエンドだ」というかもしれないし、別のある人は「老婆から奪った金は一時のものであり、また苦しい

思いをするかもしれないし、更に辛い出来事が起こる可能性もあるのでバッドエンドである」というかもしれない。ちなみに私は、後者の意見に賛成である。何故なら、私自身、この物語は最後まで救いようのない話だと思っているし、何よりも誰も幸せになれないからだ。

もし、老婆の「死人の髪の毛を抜いてカツラにして売る行為」、下人の「老婆の着物を剥ぎ取る行為」を許せるかと聞かれれば、私は明確に答えることができない。私の中にある正義感から判断するのであれば、それらは許されることではないと思うが、下人や老婆の生活状況や心情を踏まえた上で判断するのならば仕方のないことだと思ってしまうからだ。そして、もし私がこの２人の立場なら、死にたくないが故にこのような「悪いこと」をしようとする考えが浮かんでしまうかもしれない。そのため、簡単に第３者の視点から正義感を振りかざすことはできないのである。しかし恐らく、生活に困った私が選ぶ結末は「飢え死に」である。なぜなら、「悪いこと」を思いつくだけで、私にはそれを実行する勇気も気力も無いからだ。また、盗みをすることによって誰かの生活を壊してしまうかもしれない。私は誰かの生活を踏みにじってまで生きたいとは思わない。

私は「羅生門」を読んで考えさせられたことが沢山あった。そして、今の時代でも、下人や老婆のように生活に困っている人が沢山いる。下人が生活に困って、善の心を無くしてしまったように、その人の道徳心ではなく、置かれた環境が犯罪を引き起こすことにもなりうると感じた。下人や老婆は、「助けて」と声を上げることはできなかったのだろうか。また、本来下人や老婆を支えなければいけないはずの社会は、彼らに手を差し伸べることはできなかったのだろうか。もしこのような状況が私の身近で起きていたら、最初に手を差し伸べられるような人になりたい。

＜指導者の言葉＞

本作品は、「言語文化」の授業で扱った小説「羅生門」を通して、生徒が学んだり考えたりしたことを文章でまとめた作品です。

授業では登場人物の行動や情景描写等から心情の揺れを読み取ったり、意見交流を行ったりし、問いを焦点化して深く思考していくことを目指しました。物語の中では、盗みを働いた主人公がその後どうなったのか明らかにされていません。クラス内で意見が割れ、説得力のある推論を立てようとしたことが、テクスト読解への必然性に繋がりました。

また、指導の軸として“論理を飛躍させず、叙述に即して物語を丁寧に解釈すること”や、“下人や老婆の行動について、自分と比べながら読み、自分のものの見方や考え方に気付いたり広げたりすること”を意識して取り組みました。

下人にあったはずの善心、自分と同じようにもっていたかもしれない罪悪感。そして、天災や飢饉に遭う人々を助けられない社会。本作品では、生徒が物語の中で異質な他者と出会い、思いを馳せたり、自分の価値観と比べながら善悪について考えたりした様子が伝わってきます。

本生徒は真面目で強い正義感をもっていますが、文章を書いていく過程で「簡単に第３者の視点から正義感を振りかざすことはできない」「置かれた環境が犯罪を引き起こすことにもなる」と考えを広げることができました。生徒が、考え方の違う他者として下人や老婆を尊重し、想像力を働かせて理解しようとしたからこそ得られた学びです。

「羅生門」の一読者として、物語と真摯に向き合う態度について教わったように思います。